鹿児島県川辺町における住民の「まちづくり」について

田　島　康　弘

(2001年10月9日　受理)

"Machi-zukuri" (Town Planing) by local citizens
in Kawanabe Town, Kagoshima Prefecture

TAJIMA　Yasuhiro

目　次

第1章　研究目的
第2章　まちづくり委員会による「まちづくり」の動き
　第1節　川辺町の地域振興計画
　第2節　水輪の里地区におけるまちづくり委員会の活動
　第3節　風輪の里地区におけるまちづくり委員会の活動
第3章　自主的な住民による「まちづくり」の動き
　第1節　「森の学校」
　第2節　「ワイルドヤング21」
第4章　まとめ

第1章　研究目的

本研究は「まちづくり」をめぐる地域住民の動きを紹介，分析し，現代社会においてその持つ意味について検討しようとするものである。

筆者の専門は人文地理学，社会地理学であり，イギリスなど海外においてはこの分野が「都市計画」や「まちづくり」さらに「社会の諸問題」を扱う傾向が少なくないどころか，中心的な内容にすらなってきている。ところがわが国においては，こうした内容は都市計画学や社会学，地方財政学等の分野においてより活発であり，地理学においてはこうした現象に取り組むことを回避してきた傾向すらあった，と残念ながら言わざるをえない状況があるといえよう。

本研究はこうした現状に対する反省を踏まえて，地理学の分野からの「まちづくり」の運動へのアプローチを試みようとするものである。

分析の対象として，鹿児島県川辺郡川辺町における住民の「まちづくり」について取り上げる。その理由は，川辺町が県内ではかなり活発な地域住民による「まちづくり」への取り組みが行われている地域のうちの１つだからである。

また，本稿では「まちづくり」の中でも環境に関わる「まちづくり」，とくに身近な環境を生かした「まちづくり」に注目する。問題をあまり広げずに一定の枠や範囲を限定した方が分析や比較がしやすいと考えられるからである。

住民に対する集中した聞き取り調査は2001年７月17日から20日にかけて行った[注1)]。この他，5～６月にかけて役場を中心とした事前の調査および７～８月にかけての住民を中心とした事後の調査を行った。

以上の結果，住民による環境を生かした「まちづくり」の動きは２つの種類に分けて整理することができるものと考える。１つは町行政と関わりが深く，少なくとも形の上では行政の下で行われていることになる「まちづくり委員会」の動きであり，もう１つは行政との関連がなくはないが，基本的には住民自身が独自にイニシアチブをとって行っている「まちづくり」の動きである。
以下，第２章では前者の「まちづくり委員会」の動きの紹介と分析を行い，第３章では後者の住民のイニシアチブによる「まちづくり」の動きの紹介と分析を行う。そして第４章で全体の考察を行うことにしたい。

第２章　行政と連携したまちづくり委員会による「まちづくり」の動き

第１節　川辺町の地域振興計画

1998年３月，川辺町は町の総合振興計画である「川辺やすらぎ物語」を「策定」し発表した。これは行政として作成した町づくり計画であった。この内容は筆者なりに要約すると１）住民自治，２）水の環境づくり，３）産業振興，４）豊かな文化，５）健康と福祉，の５つからなっており，更に具体的には町内を４つの地区に分けて，それぞれの地区の特徴にあった計画を実施していこうとするものである。そして，上記１）の住民自治に関連して設けられたものが「まちづくり委員会」であった。

「まちづくり委員会」について「川辺やすらぎ物語」では次のように説明している[注2)]。すなわち，まちづくり委員会とは，

(1)　地域住民が自分の地域のことや町の進むべきことについて，調査・検討・協議し，行政や議会に意見を言ったり，自分たちで決めたことの実現に向けて推進する組織。

(2)　会議は，公開・自由参加とし，利害関係・利己主義を乗り越えて地域全体の発展を目指す。

(3)　この意見および委員会の意思表示は，まちづくりに生かされます。

こう記載している「やすらぎ物語」の作成経過にもこの「まちづくり委員会」が参加しており，町長によれば「まちづくり委員会を中心にこの計画を策定致しました」とさえ述べている。

ここで，この「川辺やすらぎ物語」に対する筆者の感想を述べておきたい。

まず，まちづくりのエネルギーの主体を住民に発揮してもらおうという発想は大変すばらしいと感じた。また，「支援町民」の考え方，すなわち，町外に住んではいるが「川辺町に愛着を持ち，川辺町を応援し，様々な情報を提供したり，時には町を訪れる人」を「支援人口」として町民として位置付け，活用しようとする発想も大変おもしろく，かつ有意義なことであろうと感じた。

問題点としては，

(1)　産業政策がやや抽象的で各産業分野の具体策が弱いのではないかということ。

(2)　一方では「住民主体」といいながら，他方では「住民の行政への参画」を求めるなど，両者の関係が必ずしもすっきりとはしていないこと。

(3)　全体として，理想やアイデアは多く述べられているが，問題点や課題の指摘が弱く，現実性，説得性に欠けるのではないか。

などである。

既に見たように，川辺町のまちづくりは具体的には地域の特性に合わせて4つの地区に分かれて行われている。これらはそれぞれ地輪の里（北西部），水輪の里（北東部），火輪の里（中央部），風輪の里（南部）と呼ばれている[注3)]。

まちづくり委員会の活動を具体的に見るにあたって，本稿では水輪の里と風輪の里の2地区を取り上げて検討することにしたい。

第2節　水輪の里地区におけるまちづくり委員会の活動

この地区は，鹿児島市と結ぶ国道225号線の沿線上にあり，水輪の里の名のごとく町内でも最も水の豊かな地区である。

当地区のまちづくり委員は当初21人で発足した。町による多角的な人選と広報の呼びかけに応募した人々からなっている。以下，委員長の西迫氏の話を参考に会の活動について記す。

会は毎月1回第2水曜日に例会が開かれ，年平均10回ほど持たれてきた。発足当初は出席率は100パーセントであったが，だんだん悪くなってきたのでメンバーを入れ替えたりした。最近の出席率は50パーセント近くである。

この会はいくつかのユニークな活動を行っている。1つはこの地区の中心部に建設された「道の駅」に対する関わりである。2000年4月28日オープンした道の駅「川辺やすらぎの郷」には提案，設計の段階から委員会が関わった。特に，設計については地区民に公募し，20近くの応募案の中から採用のものが選択され，ほぼ原案に近い形で実現した。ただ，住民の案が全面的に認められたわけではなく，住民の側からすると「行政の壁」を感じたとも言われている。

2つめは，万之瀬川をきれいにすることへの取り組みである。この地区は万之瀬川の源泉または上流に相当する。どうしたら万之瀬川をきれいにできるかを考えてこの地区では「2001年ドングリの森を作る会」を結成した。この会は杉や檜の森ではなく，水の浄化を行う雑木の森を作るために植樹を行うもので，こどもたちの組織として「緑の少年団」を作っている。苗の購入資金だけは町の予算で出してもらい，土地と労働力は委員会が中心となり，ボランティアで行っている。また，川に孟宗竹を植え，こどもを川に近づけないようにしようとする教育委員会のやり方とは逆に，こどもが川で遊ぶことができるように活動している。カジカやホタルが住み着いていた昔の川を取り戻すために，空き缶拾いや川掃除なども行っている。

3つめは「川の木づくり」の活動である。川の木とは，川の支流を地図化したもので，実際の活動は支流のいくつかのポイントで水質の調査を行い，川の水の汚れの状況を把握して地図に表し，汚れの原因や対策を考えようとするものである。この地図上には水質の汚れの状況だけでなく，動植物の調査も合わせて行い，その写真なども載せて作られているようだ。汚染の原因としては生活廃水や養豚場からの排水，茶畑から流れる水等があると考えられている。この調査では，水輪の里の中を更に4つの班に分けて，より詳細な調査に取り組んでいるという。

みんな自然派なので環境を壊さないことを大前提としており，中には町外鹿児島市在住の「ふるさと川辺会」のメンバーも参加している。実際に「川はきれいになってきている」と捉えている。

以上見たように，ユニークですばらしい活動を行ってきた委員会ではあるが，問題点もいくつか指摘されている。1つは委員の結集が以前ほどは集まらなくなっている。2つめは住民参加といいながら，住民が行った提案は結局行政によってチェックされるのであり，行政主導となっている点がある。3つめは道の駅などの施設も町民自身が歩を向けるような施設に成りきれていない点である。

以上のような問題点が指摘されているものの当委員会の活動は水の環境づくりを中心とした実質的には住民主導に近いまちづくり運動として捉えることができよう。

最後に，当委員会が地区住民に対して行ったアンケートの結果を分析することにより住民の生の要求や意見，アイデア，提案等を整理し，そうする中で当地区の課題について探ってみたい。

このアンケートは5つの分野に分かれており，この5つとは1）産業の振興，2）住宅と自然環境，3）高齢者など社会的弱者，4）教育，5）自由意見の5つである。以下1つずつ見ていきたい。

1）産業（農・商・工・仏壇業）振興について

農業では販売価格が安い中で直売場が町内，鹿児島市等にできないか，耕作放棄農地の活用，園芸・花卉の重視，有機・無農薬栽培の推進等の意見や提案がなさていた。

商業では中心商店街を再開発し，若者の集まる地区や店を設けたらどうか，年1度の二月市を月1回開くようにし，これを梃子にして商店街の活性化に繋げるというアイデアがあった。

工業では田代地区への工場誘致とスカイラインとの道路整備を進める意見と，誘致をしてもそこ

で働く人は町外者や町外居住者が多いので意味がないとする否定的な意見とが出されていた。

仏壇業ではまずは町民が仏壇業のことをもっと知ることで，そのためにも一箇所でわかるセンターを作るとか，仏壇技術を生かして日用品を製作・販売したらどうかとの意見があった。

以上，産業の各分野で現状に基づいた貴重な意見や提案がなされていたと思う。

2）住宅と自然環境（川・山・水など）

住宅ではもっと公営住宅を建設し，若い人が住めるようにすべきという意見が多かった。また，自然環境では何といっても川や川岸をきれいにし，フナ・メダカ・ホタルなどが棲息することができるように，また，こどもたちが遊べるような場所を増やすこと，そのためにも家庭排水・畜産等の汚水の処理施設や下水道を作る，などの声が出されていた。

この他，各集落に散歩道を作るとか，山歩きのためのルート地図を作るなどのユニークな提案も出されていた。

3）高齢者などの社会的弱者（障害者・幼児・寡婦等）

高齢者の問題では，こどもが町外へ出て独居老人が増えており，中には寝たきりの人もいる。こうした状況に対する対策とともに，年寄りの知恵を資源として生かすことや，こどもと交流できる公園を作ること，更に老人のユートピア集落を，などの意見が出されていた。また，高齢化で道路清掃等の小組合の行事も困難になっていることや小組合の行事への半強制的な参加は見直すべきではないか等の意見もあった。

4）教育

教育関係では成人学級を求める意見が目立った。高齢者を先生として生活の知恵を学ぶとか，夜間にとか，集落単位でとかの意見もあった。

5）自由意見

自由意見では，美しい自然を壊さず，静かな田園風景の町を目指す。また，川を泳げるくらいにきれいにし，川沿いにはサイクリングロードや散歩道，休憩所・釣り場などを作って，川を生かした町づくりをするなど，まさに川辺町にふさわしいと思われる意見があった。そのためにも，豚のし尿の臭いの問題の解決が望まれよう。

第３節　風輪の里地区におけるまちづくり委員会の活動

この地区は町の南部にあたり，森林の多い地区である。また，町のごみ焼却場が設置されている地区でもある。発足当初，委員は15人でスタートし，全戸（623戸）配布のアンケート（393戸回収，回収率63.1%）やまちづくりの先進地である水俣への視察などを行った。また，２年目にはごみ問題に，３年目の昨年は「森のデザイン会議」に取り組んだが，会員出席率がよくなくなってきたことなどから，４年目の今年は５人程度の少数精鋭の委員での活動を考えている。

今まで行ってきた主な活動は，今述べたごみ問題への取り組みと「森のデザイン会議」への取り組みなので，委員長の東氏の話や氏からいただいた資料を基にして，この２つを中心に会の活動に

ついて述べる。

1）ごみ問題への取り組み

当地区には町のごみ焼却施設があり，一時，高濃度のダイオキシンの土壌蓄積が問題となったところである。こうしたこともあって，ごみ問題への関心は高かった。委員会は2年目に入って，この問題に取り組むことにした。まず道路に落ちているごみに注目し，委員会がこども会と協力して，捨てられているごみの調査を行った。ごみを拾い回収して洗い，種類別に分けてその数を数えた。参加したこどもは風の子調査隊と名づけられ，その数は約百名にのぼり，感想が作文にされた。「美しい川辺町にするためには，まず自分の心，地域を美しくしていくことが大切だと思った」などの感想文が書かれている[注4)]。

2）「森のデザイン会議」の取り組み

このデザイン会議は昨年（2000年）第1回が行われ，今後も地区内の場所を変えて行われる予定のものである。会の主催は実行委員会形式を取っているが，まちづくり委員会も共催となっており，委員会の活動と見てよいであろう。

ところで，デザイン会議とは「住民が主体となって行政と協力しながら地域の特性や資源を再認識し，地域の持つ可能性を探」[注5)]るためのワークショップを行うというものである。具体的には小グループに分かれてフィールドウォッチングを行い，宝物（資源）マップを作成し，これに基づく話し合いから生まれた地域の新しい価値観を生かして未来設計図を描き，発表しあうというもので，自分たちの住む地域や環境を調べ，見直し，これらを基礎とした地域づくり運動の1つの試みであるといえよう。この環境デザイン会議の活動は水俣の資源マップ作りの活動や北海道旭川を中心として行われている環境地図作りの活動などを発展させたものということもできよう。

第3章　自主的な住民による「まちづくり」の動き

第1節　「森の学校」

1）森の学校とは

森の学校とは何よりも「都市生活者の人間性回復の場」[注6)]すなわち都会生活者が自然の中で癒され，人間性や生きる力を回復する，そういう場であるといえよう。これを開始したのは，かつての都会の企業戦士であり，こうした生活の限界を感じてたまたま鹿児島市に住み始めた中で，自然とともに暮らす生活を探求するに至った1個人，北島淳朗氏とその家族であった。氏はまずこうした生活に適した場として県内の廃校跡地を捜し歩き，川辺町南部の旧長谷小学校跡地をこの最適な場所として決め，町と交渉しその協力を得て森の学校を開校するに至ったのである。

2）森の学校の活動

その活動は1997年（平成9年）から始まり，活動内容は毎年少しずつ改善され，変化し発展し

てきている。活動１年目の1998年は農業体験が主な活動であったが，２年目の1999年には⑴農業，⑵自然体験，⑶工芸体験，⑷生活伝承・生活体験の４分野に分けて活動を行った。2001年の今年度は⑴森の工房（陶芸，木工，織り，野の花スケッチ），⑵くらし工房（生活の知恵の伝承），⑶田んぼの学校（米作り），⑷フォレスターランド・クラブ（野山のフィールドでの遊び・自然体験）の４分野で活動を行っている。参加家族は，１年目（1998年）が65家族，２年目（1999年）は135家族，３年目（2000年）は80家族，４年目（2001年）は73家族であり，参加家族の特徴としては90パーセント近くの大部分が鹿児島市の団地（皇徳寺，星ケ峯等）の居住者で，県外から転勤した人であり，小学生くらいのこどもがいる世帯が多い。しかし，中には加世田市，枕崎市の居住者や50代の夫婦の参加者もいる。

３）行政や地元民との協力の進展

森の学校の大きな特徴の１つは，北島氏が地元民の中に溶け込み，地元民との協力関係がしっかりなされていることである。確かに，最初はどんなよそ者が来たかと警戒されていたという。しかし，氏が地元で行われる草払いや運動会に参加するようになってから，次第に馴染んできたという。また，氏は地区のことなら何でも知っている区長の川原氏を尊敬し，川原氏の協力も得てきていた。森の学校の行事の一つである生活伝承の講師として川原氏の奥さんや地区民の協力も得ていた。こうして今では北島氏はすっかり「地元の人」として認められている。

地元の人に言わせると，何よりも地区に活気が出てきたという。「若いもンは出てくし，年寄りは増えてた。でも，『森の学校』には人が集まってくる。暮らす人も増えるとええンやけどなあ」[注7]（川原勉氏）といわれるごとくである。生活伝承の講師を引き受けている川原銘子氏も「いろんな人が来てくれてにぎやか。地域が明るくなるようこれからもできることをしたい」[注8]という。

この他，森の学校の年間行事の一つで，11月23日に行われる収穫祭のイベントが，今年度から区の年間行事に入れてもらえることになったことも，地区との関係の深まりを示す一事例といえよう。

他方，森の学校の活動は，行政からは地域間交流（都市と農村の交流）の活動として捉えられている。「『交流』を通じて地域の活性化を図」る活動であり，また，「定住者が地域社会の起爆剤となり，地域のプロデューサーとして活性化を推進していく」[注9]ことを期待しており，更には「今後は現在の交流事業を踏まえ地域に根ざし，地域と関わった活動など地域振興に資するような活動もご検討いただきたい」[注10]との期待も寄せているのである。

総じて行政は北島氏の活動を町の施策の一環の中に位置付け，氏の活動に協力し，また，これを支えても来ており，例えば2000年度には旧長谷小学校施設の外壁改修や水洗トイレ化，2001年度にはビオトープの設置，講堂の畳の入れ替えなどを，予算を計上しておこなっている。

４）北島氏の考えについて

最後にこうした事業を現実化するに至った北島氏自身の考え方について，若干の検討をしてお

こう。森の学校は都会生活者が自然に接して癒され，人間性を回復して活力を得る場であった。ここに見られるようにますます都市人口の比重を高めている現代社会において，多くの都会生活者は自然を求めている。言い換えると，都会人には自然が必要なのである。人間の生活にとって本来的に自然が必要なこと，これは間違いのないことであろう。

他方，農村にはこうした自然が豊かに存在する。農村の人々は始めから豊かな自然の中で暮らしているのであるが，その青年達はほとんどの者が都会へ向っている。その理由には未知の世界へのあこがれや自己の可能性の検証など前向きのものもあろうが，何といっても仕事の獲得であろう。

こうした都市と農村の現状の中で，北島氏は「両者の折り合いをつけていくことがこれからの私達のあるべき姿ではないか」という。ここで氏の言う両者とは，1つは自然に囲まれた地域との関わりであり，もう１つは情報ある世界との関わりであるという。前者は農村，後者は都会とも言えようが，前者は原始社会，後者は文明社会ともいうことができるのかもしれない。

この「折り合い」に関連して，氏は「都市の中でも森の学校は見つけられる」とも述べている[注11)]。すなわち，都会人に自然との関わりが必要であることを認めた上で，この関わりにはいろいろな形態がありうることを氏は認めている。例えば，ガーデニングやペットなどもその一形態といえようし，ハイキング，登山，さらには自然の中への旅行なども１つの形態であろう。農業体験としてのグリーンツーリズムなどもこの一形態であり，森の学校はこうした都会人の自然との関わりの一環として位置付けられるものであろう。

ただ，森の学校にはリーダーがおり，集団で行われるなど，現代日本社会の特徴にマッチしたものなのかもしれない。

他方，農村の側が求めているものは情報かもしれないが，何と言っても決定的なものは仕事の機会，収入の入手先の確保であろう。従って，やむをえず多くのものが都会へ出て行くが，これだけが唯一の手段であるわけではないことも確かである。農業や地場産業など農村内部の仕事に着くことや，通勤はしても居住地は農村におくなどの形態がこれに相当するのであろうが，この困難性や問題性については水輪の里のアンケートのところで見た通りである。

以上，北島氏の考えの一部を紹介し，若干の考察も付け加えた。森の学校が成功しているのは，以上のほかにも氏の地元の人から学ぶ姿勢や明朗性（天真爛漫な性格），実践性，百尺竿頭如何歩進の精神[注12)]など様々な要素が絡んでいるであろう。

第２節　ワイルドヤング21

ワイルドヤング21とは，川辺町平山地区の「むらおこし集団」のことで，1997年に地区の農業者を中心として結成され，その主な活動は秋に休耕田にワイルドフラワーの種を蒔き，花の咲く翌年の春に花つみ農園として開園するという一種の観光農園的な活動である。

本節は主にメンバーの一人であり，役場税務課に勤務する下薗氏からの聞き取りによっている。

会結成のきっかけは，それ以前にもこの地区の青壮年の人達，すなわち，親がいるのでその面倒も見，地域に残って農業をしていた者達は，月１回各家庭を持ち回りする親睦のための飲み会を行っていたが，環境の問題が言われる一方，地域の中の連帯も弱くなってきている中で，自分達も「飲み会」だけではなく何かやろうということになり，こうした主旨に賛同する者でこの会を発足させた。

当初の会員は27～28人であったが，現在は23名である。年齢は30～70代までいるが，40～50代が多く，30代が幾人かと75才が１人いる。実質年齢は必ずしも「ヤング」ではないが，気持ちでヤングと名付けている。地域は平山の上・中・下の小組合の人々からなり，職業は役場，農協，建設会社，仏壇業者，会社員など様々である。会長の福元氏の職業は園芸（花作りやメロン栽培）である。

休講田の活用に注目したのは，ただでさえ後継者がいない農家が増えている中で，減反政策により休耕田が荒れていたため，これを何とか活用できないかと考えたことによる。アメリカでワイルドフラワー園をやっていることを知り，ヤグルマソウ，カスミソウ，リナリア，デモルフォセカ，ストロベリーキャンドル，ムギナデシコ，ポピーなど10数種類の種を休耕田に蒔くことにした。この休耕田のある平山地区は役場の南にあり，1957年の農業構造改善事業により１区画が3000平方メートル（３反）という広さに整備されており，この３反の１区画を４枚，すなわち，１町２反に1997年10月末，種まきをした。翌年３月から花が咲き始め，5月末ごろまで続いた。最初の年の1998年にはマスコミも取り上げ，鋏はこちらで用意し１束500円と300円の２種類とした。この年は合計7000～8000人が来園した。会員の中でトラクターを持つ者は耕起をする。花の咲く時期には鹿児島市のいずろドームで「花を摘みに来ませんか」という内容のちらしを配って宣伝する。２年目には，西鹿児島駅から出るバス１台をチャーターし，岩屋公園の桜，道の駅である「やすらぎの郷」(ここで昼食)，ワイルドフラワー園を巡るという試みも行った。

また，２年目にはチューリップを咲かせようと２万球を植えたが，これは南国のせいか，うまくいかず１年で頓挫してしまった。今年度は４月１日にワイルドフラワー園のオープニングセレモニーを行い，テープカット，マラソン大会，握り飯と豚汁の提供などを行った。

ワイルドフラワー園のほかに，昨年からは休耕田に野の花だけでなく大豆の作付けも始めた。その作付け面積は10町歩ほどでここからは確かな収入も得られ，この収益でよその先進地を見る研修旅行なども実施している。

以上の休講田を利用した活動以外にもワイルドヤング21は「堤防払い」や「フラワーロード事業」にも関わっている。「堤防払い」というのは万之瀬川堤防の土手に生える草の刈り取りのことで，こどもが遊べるような場所にするため，メンバーが共同で草刈機を使って草を刈っている。その時期はフラワー園の仕事のない７月～10月の間である。

「フラワーロード事業」とは，花を育て道路の各所に育てた花のプランターを置き並べる事業のことで，町の事業であるが，もう１つの古殿のグループとともに町から委託を受けて行っているもので，両グループとも500プランターずつを受け持っている。春はマリーゴールド，初夏にはサル

ビア，冬はビオラと年３回プランターに植える花を代えており，川辺町の道路からは花が耐えない。

ワイルドヤング21の活動は以上のごとくであるが，いくつかの問題点や課題も指摘されている。

１つは運動が熱しやすく冷めやすいといわれている点である。すなわち，始めの１年目はぱっと派手にやって７～8000人もの人を集めたが，次第に見に来てくれる人も少なくなり，メンバーの中でも発足当初の「いきおい」がなくなって来ていることである。

２つめは会の活動はボランティアであり，活動日は土・日とされてきたが，会員には仕事があり土・日には家族サービスも行わねばならない。そのほか，地域の寄り合いや青年団の寄り合いなどもあって，フラワーヤングの呼びかけには「また出方か・・・」というような声も聞かれるようになったこと。

３つめは小さなことかもしれないが，「花摘み」のほかに「フラワーアレンジメント」も行っていたが，「フラワーアレンジメント」の方はきれいではあるが野草なので長持ちしないという問題があることなどである。

このようにいくつかの問題や課題が指摘されてはいるが，この運動は森の学校とは違って，最も広く一般的に存在する地域社会，地域組織の中から自主的に生まれてきた運動であるということが貴重であるように思われる。外から来た「定住者が地域社会の起爆剤となり，地域プロデューサーとして活性化を推進していく」[注13)]のも１つの発展の方向ではあろうが，こうしたケースはどこにでも起こることが望めるわけではないだろう。これと比べるとより広く，一般的に発展の可能性が強いのは，ワイルドヤングのような既存の地域社会，地域組織の中から生まれる運動の方ではなかろうか。こうした意味でワイルドヤングのケースはおおいに検討に値するものということができよう。

第４章　まとめ

以上，第２章では行政からの呼びかけに応じて活動を始めた「まちづくり委員会」の活動を，第３章では行政からの支持やサポートを受けてはいるが，より自主的な住民の活動を見てきた。

水輪の里，風輪の里ともどちらも住民に対するアンケートを行い，住民の声を把握し，それに基づいて活動するように努めていた。また，水輪は水を生かした「まちづくり」，風輪はごみ問題から環境を見直す「まちづくり」とそれぞれの地域の特徴を踏まえた活動を行っていた。両者とも行政からの働きかけが活動のきっかけではあったが，実質においては住民主体といってもおかしくない内容を備えていたといえよう。

また，第３章のより自主的な活動である２つの運動については第３章の最後でまとめたように外から来た定住者が「地域のプロモーター」となって活性化を推進するケースと，既存の地域社会，地域組織の内部からの自主的自立的発展としての活性化のケースとして整理できるように思われる。

運動の前進や，より住みやすい地域社会作りのためには，こうした運動の実態や問題を更に広く，深く検討していくことが必要であろう。

注１）その際には６名の学生が参加している。
注２）「川辺やすらぎ物語」p20
注３）これらの文字は町内にある史跡である「大五輪の塔」から採用している。
注４）「風輪の里便り」Vol. 2 (2001年２月10日）より
注５）森のデザイン会議実行委員会（2000)：第１回森のデザイン会　議実施報告書ｐ２
注６）北島淳朗（1997)：旧長谷小学校跡地借用についてのお願い
注７）読売新聞1998年９月６日
注８）朝日新聞2001年６月１日
注９）川辺町企画財政課の文書，「長谷小学校区活性化計画」（案）より
注10）川辺町（2001)：旧長谷小学校管理人，北島氏からの検討課題について（回答）より
注11）南日本新聞1999年「探し物の何ですか」１より
注12）南日本新聞　フェリア　2000年１月15日「会ってミント」。この意味は努力の上に努力を加えて進歩発展をはかることの意。
注13）前掲注９）

文　献

川辺町企画財政課　1998. 川辺やすらぎ物語.　川辺町.
森のデザイン会議実行委員会　2000. 第一回森のデザイン会議実施報告書.

謝　辞

本研究を推進するに当たり，水輪の里の西迫幸一氏，風輪の里の東敬一郎氏，森の学校の北島淳朗氏，ワイルドヤング21の下薗隆春氏には，当該各団体の活動や資料の提供，現地の案内など大変お世話になった。また，町役場企画商工課の東篤氏，上薗省吾氏，教育委員会の新地浩一郎氏には我々の調査のための連絡，宿の準備など，いろいろな便宜を図っていただいた。このほか，本稿には生かせなかったが，エコ・リンク・アソシエイションの下津公一郎氏にも御協力いただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。